

Title	アート領域と絡み合う文化人類学研究の新展開：映像人類学, 文化精神医学と関連する人類学, アーティストとコラボレーションをする人類学者の事例から
Sub Title	The new expansion of art-oriented cultural anthropology : from examination of several anthropologists' recent endeavors in pursuit of cultural psychiatric filming, new visual anthropological methods unfolded through collaboration with artists, and new anthropological insights through paintings during the fieldwork.
Author	宮坂, 敬造(Miyasaka, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.99 (2025.) ,p.[159]- 165
JaLC DOI	
Abstract	This research note examines the recent expansion of interactions between visual anthropology and art, as discussed by Kisin and Myers (2019). It does so through an exploration of pioneering efforts in cultural psychiatric visual anthropological works by Colucci and the innovative visual methodologies proposed by Grimshaw. This emerging trend broadens the scope of collaborations between art and anthropology, challenging the conventional boundaries that define their “desirable” relationships, which are often shaped by normative, empirically driven standards of anthropological practice. While some critics may view these developments as overly art-oriented and lacking scientific rigor, dismissing them outright overlooks their potential contributions. Instead, these new directions call for a radical reorganization of our evaluative paradigms. By embracing a pluralistic perspective, we may uncover previously unrecognized partial connections between art and anthropology (not necessarily following the idea of the dichotomy of artistic and visual anthropological films and its correlational continuum) and thereby gain new insights into the epistemological possibilities at their intersection.
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000099-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

【研究ノート】アート領域と絡み合う文化人類学研究の新展開

——映像人類学，文化精神医学と関連する人類学，アーティストとコラボレーションをする
人類学者の事例から——

The New Expansion of Art-oriented Cultural Anthropology:
From Examination of Several Anthropologists' Recent Endeavors in
Pursuit of Cultural Psychiatric Filming, New Visual Anthropological
Methods unfolded through Collaboration with Artists, and New
Anthropological Insights through Paintings during the Fieldwork.

宮 坂 敬 造*

Keiso Miyasaka

This research note examines the recent expansion of interactions between visual anthropology and art, as discussed by Kisin and Myers (2019). It does so through an exploration of pioneering efforts in cultural psychiatric visual anthropological works by Colucci and the innovative visual methodologies proposed by Grimshaw. This emerging trend broadens the scope of collaborations between art and anthropology, challenging the conventional boundaries that define their “desirable” relationships, which are often shaped by normative, empirically driven standards of anthropological practice. While some critics may view these developments as overly art-oriented and lacking scientific rigor, dismissing them outright overlooks their potential contributions. Instead, these new directions call for a radical reorganization of our evaluative paradigms. By embracing a pluralistic perspective, we may uncover previously unrecognized partial connections between art and anthropology (not necessarily following the idea of the dichotomy of artistic and visual anthropological films and its correlational continuum) and thereby gain new insights into the epistemological possibilities at their intersection.

キーワード：アート領域と絡み合う文化人類学研究の新展開，文化精神医学的映像人類学，部分繋がりによる新しい映像手法が見いだされる意義

1. はじめに

グレゴリー・ベイトソンに見られるような，人間科学の全体的総合性を標榜する志向に基づき，あえて一見拡散的な幅広い研究課題にまたがって，文化人類学研究を行ってきた，と，近年，筆者は自分自身の研究の歩みを振り返るようになった。もともとは，象徴的世界観を背景にした民俗医療とシャーマンの研究からはじめたので，大きなくりでいえば，文化と治療・医療の研究が中心であったが，土地

* 慶應義塾大学文学部および東京通信大学情報マネジメント学部名誉教授

のシャーマンが先進国からの観光客の視線の前で芸能として儀礼を演じたり、あるいは彼らが先進国に移民し同じ少数民族系集団のなかで治療儀礼を行い、主流をふくむ他の民族系に対して芸能者としてのパフォーマンスを演じている事例に接し、芸能者とアーティストが近接する様相をどう捉えていけばよいかという問題意識も持つようになった。

また、その間、ベイトソンがバリ島で先駆者として行った文化を写し取る映像手法の特徴と映像人類学の歴史上から見たその意義について筆者の観点から検討していたが、本学から認められた 2004 年度研究休暇中、マッギル大学社会文化精神医学部門と医療の社会研究学科で客員研究員として非常に幅広い学祭的研究プロジェクトやセミナーで最新の研究見解に触れる機会を得たことが筆者の研究の大きな転機となった。たとえば、医療人類学者が自分の研究していた胃癌や乳癌患者たちに同意してもらい、映像記録を試みていた例などに接し、新しい理念にたつ臨床民族誌映画の展開可能性を実感し、映像人類学の新しい展開をまとめ、新論点とコメントを行う運びになった。

こうした経緯によって文化と医療の研究と映像人類学の研究がつながる方向性が自覚されたのである(宮坂, 2011)。

ところで、映像人類学とアート領域がこれまでとはことなってきたからみあいとつながりを見せる諸研究が近年、多々発表されるようになった。アートに寄り添いそこから狭い意味での文化人類学の殻(経験実証主義的科学の殻)を部分的に破る研究群である。以前の筆者の立場では、単なる芸術志向の映画を、異文化場面を単に素材にして作成するのではなく、広い意味での文化人類学の枠の中に入らなければ映像人類学作品とはいえないと考えていたのであるが、上記の新しい動向に接し、この点を再考せざるをえない考えるようになった。本稿では、与えられた字数の範囲で筆者の再考の展開の途上を振り返ってみたい。

2. 文化精神医学研究と映像人類学

——エルミニア・コラーチによるアートをくみいれた作品の検討から

2.1. 正統派映像人類学の枠内に入る文化精神医学的映像人類学

筆者は、2024 年 3 月 12 日、京都大学東南アジア研究所主催で開催された研究セミナー“Together for Mental Health”, an interdisciplinary collaborative visual research project in Indonesia and Ghana: Three Films by the Director Erminia Colucci”に指定討論者として招聘される機会をもった。彼女の作品には、2013 年 11 月 18 日～23 日に豪州メルボルン大学で開催された映像人類学学会の一部のプログラムに筆者が関与したときに、その一面にふれていたが、当時彼女が同大学グローバル・メンタルヘルス研究所文化精神医学部門で進めていたヴェトナムやラオスでの医療人類学的映像記録プロジェクトの全体象を把握する機会がなかった。今回、彼女の文化精神医学的映像人類学作品の幅広い全体像を捉える機会をえた。ともあれ、彼女の作品は、後に述べる先端の実験的映像人類学という趣は出ていなかったもので、1975 年にジェイ・ルービーが掲げた映像人類学がまもるべき条件をもつ正統派映像人類学の枠内に入る文化精神医学的映像人類学であるとしてよからう。

3 つの作品は、①“Warak Keruron: Healing the Mothers of Lost Souls”(27mins: 流産や死産で亡くなった子どもを弔うバリ島の儀式に関する作品)、https://drive.google.com/file/d/1hHasjQJFx77J8RUBqxChVLMoEP_YnAga/view?usp=drive_link

②“We Are Family”(13mins: 西ジャワ州チアンジュールで地域へ国・地域・国際支援プロジェクトが

連携して精神保健支援をとどける現場の様子をふまえ、統合失調とされた女性の憑依体験をめぐってその家族との葛藤、夫の支持、女性が描いた絵画も用いながら女性が寛解していく過程を描いた作品）
https://drive.google.com/file/d/1d8FXP7iYRhpPxujEEcLtTkbBKm0ufsKW/view?usp=drive_link

③ “Between Two Worlds” Screening (8min: ガーナとインドネシアの人々が癒しを求める様子を並置して映像描写する実験的な作品。) https://drive.google.com/file/d/1sz_13ahH8-aozGT2OFZ5usOcagI9KAFv/view?usp=drive_link であり、解説ナレーションは英語。インフォーマントたちは、それぞれの現地言語で発言し、そこに英語の字幕がつくかたちである。これらの作品は、現時点でも公開されているので、上記の URL で閲覧できる。

作品③は、文化の異なる二つの地域の癒しをもとめる人々の描写を併置する作品だが、その比較・解説はとくに詳しくは映像のなかでは示されていない。映写後の事後セッションで視聴者からの質問に答えるという方式と思われる。

作品①は、カメラは主として中景・遠景に設定され、ところどころで近景に切り替わるが、死産を経験した女性たちへ共同体全体で慰めの儀礼を行っている場面を映していく。そこでは主としてバリ語ではなく、インドネシア語で司祭が演説しているので、伝統的な儀礼ではなく、近年新たに作成された儀礼だと了解される。

作品②は、西ジャワ州チアンジュールにおける国際的グローバル・メンタルヘルス支援プロジェクトがまずあり、そのチームとして加わった臨床心理学・文化精神医学者の作者が、支援をおこなうなかで、その過程で出会った女性患者と妻を支援する夫、憑霊するなどの異常行動に違和感をもつ家族などの周囲の反応、占い治療など、複数の医療体系にかかわる治療をもとめる行動を描写している。統合失調症診断を行う近代的精神医学概念は当初から前提とされているが、文化背景を捉えつつ治療をおこなう文化精神医学的立場に立っている。患者の女性は、夜にうなされる苦痛の経験を悪霊が自分に襲いかかるイメージで捉え、その様子を絵画の形で描く。絵画化し、また後の経緯を絵画のアートを媒介にして癒しの効果があった点が示唆されている。文化と医療の領域において、患者が経験関与するアートが一種の芸術療法となる点を描いているのである。文化精神医学とアート、芸術療法に係わる近年の課題領域において、多々示唆をあたえる作品となっている。

筆者が担当した討論においては「脱植民地主義」の立ち位置による作者の関与が映像作品のなかで一貫して現れている点を指摘したが、まさしくこの点により、好感をもって受止められる作品であった¹⁾。

3. アートと人類学の交錯の事例と今後のアート人類学の方向

——映像人類学者 A. グリムシャウの映像人類学の転回

映像人類学者 A. グリムシャウは、アートとのコラボを媒介にして新しい人類学的理解・表現を開拓する方向を自身の事例をひいて論じている。上記で検討したように、アートと人類学とは、くいちがう部分があるのであるが、双方がくいちがう部分があるにせよ、それを一部乗り越える新しい方向が開けてくる様子がグリムシャウの論文からみえてくる。

3.1. アーティストと人類学者がコラボする試み

グリムシャウは、陶芸作家の E. オーウェンとコラボレーションをするなかで、自分が映像をとるやりかたを従来のオブザベシヨナルシネマとはまったく違うやりかたに変える方向に導かれた経緯を報

告している (Grimshaw, A. 2010)。

オーウェンはキャリアの長い作家であり、陶芸作品を制作発表するかたわら、陶芸を習いたい人のためにワークショップを開き、そこでは現場でのフィールドワーク作業をおこないながら共同作業するというやりかたをとるアーティストでもあった。つまり、フィールドワーク的に外に出て周囲の風土、人々と交流しつつ、その過程で粘土の材質や釉などの質感触知感などを体感的に把握した上で、その場の感覚に即して手でこねるやりかたを工夫する手法をとっていたのである。ワークショップの参加者を粘土の独特の手こねの作業にまきこんでいく過程で、彼女は参加者を観察しつつその場に参与する自分のわざをみごとに発揮するいわば民族誌的方法をとるアーティストであったのだ。「この陶芸作家は民族誌的感性がゆたかだ」と感じた人類学者の A. グリムシャウは、フィールドワークの方法を教える自分の大学の授業にこのアーティストを招き、大学構内で野外実習をしてもらうことになる。そして、人類学とアートという二つの分野を交流させ、そこから通常のやり方でない新たな人類学方法の道筋のヒントを見出す試みを行ったのである。学生が野外で見つけたモノのすがたを当たり前の分類で把握するのではなく、まず多方面から感覚的に感じとってゆくという作業から始めたのであった²⁾。人類学部の学生たちは結局、このアーティストのフィールド作業やり方が、学問分野の人類学のやり方から見るとゆる過ぎる面が感じられてしまい、学生の側では防衛反応が起こり、学生が実習を通してアートと人類学の創造的交流を探るというグリムシャウの試みは、失敗に終わることになる。

その後、グリムシャウは陶芸作家オーウェンに招かれ、ケンブリッジ大学界限にあるアート制作の場タクシー・ギャラリーにおいて、彼女のアート制作と自分の映像人類学的撮影法をつかった映画作成とをコラボする機会をつかむことになる。「生地素材の女性」と題されたオーウェンがおこなったアート制作は、観覧用放置タクシーのなかに3週間住み込みながら編み物の生地素材を紡ぐパフォーマンス行動であった。映像人類学的記録映画作成の場合、ふつうは、観察シネマ法 (observational cinema)³⁾ を使って、オーウェンがタクシーに住む様子や縫い物風景や周囲の光景や聴衆などをくまなく撮影するやりかたになるはずであった。しかし、グリムシャウは映像を撮るカメラをオーウェンが経糸と横糸をつむぐ手の動かし方を撮影する過程だけにレンズをむけるというやりかたをとることになった。こうして、アート制作とコラボする文脈をとりこんだグリムシャウなりの〈新たな撮影法〉が開拓され、映像人類学作品として斬新な映画が生み出されたのである。

3.2. 実験的かわりから、新しい映像手法が見いだされる意義

今までの考え方では、陶芸作家の E. オーウェンのアート作業を文化人類学的ドキュメンタリー映像で描くためには、このようなこの新しい映像作品以外にも、オーウェンの当日のパフォーマンスを観察シネマ法に準じた映像による記録作品やオーウェンのアーティストとしての歩みや生活史、作品の特徴を描く別の映像人類学作品が必要であろう。それらの別の作品との対照・対応関係になかで、グリムシャウの新しい映像手法による作品の付加の実験的意義が確定されることになろう。

とはいえ、これまでに映像人類学ではあまり撮られていなかった新しい手法をアーティストのコラボの過程を通して開拓する展開となったことは、大いに意義があるといえるのも確かである。ヴェトナム系アメリカ人前衛映画作家トリン・T・ミンハのいう「なにかについて語るという方法ではなく、なにかの傍らにしながら語る」、という試みを行ったともいえ、映像人類学者 A. グリムシャウなりの、ふたつの異分野の「間にわけいて」二つをつなぐ新たな方法のありかたを示しているともいえるだろう。

ここで思い出されるのは、1960年代、S. ワースらが⁴⁾ アメリカ先住民ナヴァホ自身に彼らの文化場面を映す映画を作成させた事例である。アメリカ先住民のナヴァホ族7人の男女に当時軽量化されたベルとハウエル社製新撮影機の使い方を教え（白人の大学生が2ヶ月かかるところを3日間でマスターし、また、通常2年はかかる作品完成が2ヶ月でできたそうである）、ナヴァホ自身の文化場面を映す映画を作成させた。7つの作品事例をみると以下の作品が注目される。

ナヴァホの女性が彼女の母が糸を紡ぎ、縦糸と横糸で毛布を交互に織っていくその動作を撮影カメラで映しているのだが、母の動作を連続映して撮影するのではなく、織り動作をとびとびに不連続につながりかたで動き全体を捉える独特の撮影法となっていた。動き全体を捉える傾きはナヴァホ文化の特徴と考えられるのだが、間をわけけるコラボの文脈から開拓されたグリムシャウの新傾向の映像人類学作品がナヴァホの作品と一面では通い合うところがあったのは興味深い。

3.3. 映像人類学をはじめとするアートと人類学の新しいつながりの潮流

グリムシャウはさらに複数のグループワークを通してこの問題を探求している。彼女の新傾向の映像人類学的研究は、従来の映像人類学の枠組みを超えるものであると同時に、映像に限らないやりかたでアート領域と部分部分でつながっていく新傾向の文化人類学研究につらなっていく側面がある。彼女の試みを、アートと人類学の新しいつながりの潮流になかで再度検討するべきであろう。

フィールドワークのなかで人類学者が現地ノートを著わすようなやり方でアート制作をおこなう方向を目指す試みがある。さらには、それが論述による言説ではなかなか捉えがたかった異文化理解を深める契機になった研究事例があるが、これまでのような、論述を通しての理解ではなく、アートの表現を媒介にした理解、あるいは、アート作品自体もしくはアート制作過程自体が異文化理解の作業を非論述的なかたちで促進する側面を例示しようとする研究などが注目される⁵⁾。

アートは人間の感覚をひろげ、人間経験において間をつなぎ閉鎖系の秩序を広く解き放つ方向を宿している。かつては、収束する体系性がえられなくてそれをめざす社会科学としての人類学とは結局は相容れないとされてきたのだが、近年は、新たな問題の発見に導くアートとのコラボを媒介にして新しい人類学的理解を開拓する試みがさまざまにおこなわれている。この広がりから実に様々な新しい方向性が示唆されている。2019年の人類学評論年報誌でもこの点が指摘されている。これらの広がりを総覧して従来の見取り図を改訂していく作業が必要となっているのだが、それはなかなか難しい作業となっている⁶⁾。

現在は、そうした試みを広範囲に収集・検討し、文章表現だけに終わらない人類学的理解・表現の可能性を見極めていく段階であるといえるであろう。

アート映像と映像人類学による映像を両極と捉えながら一次元的相関をみる従来の議論を超える枠組みにたつて、複数次元の部分繋がりに注目する複眼的検討が重要となってきた。そうした検討を積み重ねる態度の獲得を目指し、試行錯誤する多々の試みを包括的に検討していくことに、今後のアートと人類学の新しいつながりの潮流を切り拓く価値が認められる。

注

1) 筆者は次の論点から討論を行った。

1. Filming the Journey of Recovery”—Sufferers via their ‘Lived Voice’: Broadly speaking, her films, focusing on traumatic episodes of local people, can be characterized as works of “Filming/Tracing/Directing the Journey of Recovery” of sufferers, through depicting their “Lived Voices of Traumatic Episodes/Incidents and Processes to Recovering, with elaborated visual methods (observational and participatory approach, photo-poetic, juxtaposition of sufferers’ talking process and local scene screening, art-based approach, focusing on sufferers’ paintings or drawings, or filming two different cultural therapeutic scenes, etc. [a large sequential unit punctuation covering oscillation between the outside (alienating/run-away) and the inside (opening up to new encounters with remedial resources and supporters)].
2. ‘Person-centered Ethnographic Participatory’ method going beyond observational cinema: This is the indispensable aspect for clinically oriented visual medical anthropology. All contain voicing by the sufferers/patients themselves who agree to tell their subjective experiences in front of the camera [this is the key point of her participatory visual methods that assure decolonized filming of sufferers] so that their disclosed talks of lived traumatic experiences can contribute to make other people (other sufferers, caretakers, community support groups, and nursing psychiatric practitioners) come to understand processes of subjectively split experiences accompanying social difficulties (like pasung or local customs of the chained custody).
3. Activist’s baseline (against violations of global human rights standards) with balanced goal orientation towards possible/potential loose reintegration of traditional remedial resources and cultural psychiatric partly intervened supports and corresponding state-level mental health policy making: intermediating reflexive approach to rearrange the shifting balance.
4. Offering the (potential) scene of field-based research activities (such as the University of Melbourne, Global Mental Health Institute’s oversea projects, which makes the audience/viewers understand the underlining research background of the film director’s basis for her filming approach.
5. Cultural Psychiatric Focus on typical contemporary global-state-local circumstances with regard to coexisting plural systems for therapeutic treatment.
- 2) 2024 年 4 月、来日した人類学者の Maruška Svašek 先生 (Professor, Centre for Creative Ethnography, the School of History, Anthropology, Philosophy, and Politics at Queen’s University, Belfast, U. K.) のアートの人類的研究チームがおこなったサウンドワークショプと類似したやりかたの手法であったが、アート志向の感覚人類学でつかわれるひとつの手法でもある。
- 3) 観察シネマ法 (observational cinema) ——1960 年代、より軽い撮影カメラで同時録音ができる装置が利用可能になった時代に、撮影対象場面への撮影者の思い入れを避け、客観的に観察する視点で撮影することが提唱され、ドキュメンタリーフィルムや映像人類学の作品制作の基本法となっていたのが観察シネマ法であった。とはいえ、その後、90 年代に入ると、撮影対象場面への冷静な観察態度をとる立ち位置を超えて、撮影対象の人々の場面にもっと寄り添い、また、参与観察を行う映像人類学者の役割を映画の視聴者がもっと身近に感じられるような映画製作過程を志向するように、観察シネマ法は改訂されていった。MacDougal, D. (1995) “Beyond Observational Cinema,” pp. 115–132, In Hockings, P. ed. *Principles of Visual Anthropology*, Walter de Gruyter & Co. 1995.
- 4) Worth, S & Adair, J. (1972/1997) *Through Navajo Eyes: An Exploration in Film Communication and Anthropology* University of New Mexico Press および *A Navajo Weaver* directed by Susie Benally.
- 5) Osman “Making Art Ethnography: Painting, War, and Ethnographic Practice.” In Shneider, A. & Wright, C. (Eds.) *Between Art and Anthropology*, Berg 2010: 127–134.
- 6) 芸術の人類学の展開を論ずる Kisin, E. & Myers F. (2019) “The Anthropology of Art, After the End of Art: Contesting the Art-Culture System.” pp. 325–26, *Annual Review of Anthropology* 48(1). 参照。この論文のなかでもアートと人類学のかかわりの新たな探求が盛んに行われつつあることがのべられている。

なお、筆者は、F.W. Hickling が開拓した心理歴史誌的文化療法の紹介と検討を行ってきたが、ここでは、この療法の単に西欧精神医学的な芸術心理療法をジャマイカに応用したものではなく、ジャマイカの歴史の変遷にそって形成されたジャマイカ人の心理的布置と身体的布置が重層化した文化身体的基層に注目した。ジャマ

イカ人のこの布置・基礎によって、西欧精神医学的な芸術心理療法が一部脱中心化され、ジャマイカ独特の療法部分が拡大してアマルガム化し、特有のハイブリッドとなったと考える。このこみいった事態には、双方の部分繋がり^が、複雑な変容を導くという観点が重要になるとと思われる。これと比喩的に同等に、アート領域と人類学領域が輻輳する部分繋がりによって相互が複雑に変容する過程をとらえる視座の開拓が期待されるのである。

文 献

- ファビアンヌ・デルピ＝アドラー、前田富士男、宮坂敬造（2006）「一九六〇年代日本の〈映像〉芸術と倫理」、慶應義塾大学二世 COE 人文科学拠点〈心の統合的研究センター〉Newsletter, No.15, pp. 2-6.
- Grimshaw, A. & Ravetz, A. (2005) *Visualizing Anthropology*, Intellect Ltd. Grimshaw A, Ravetz A. 2015. "The ethnographic turn— and after; a critical approach towards the realignment of art and anthropology." pp. 418-34, *Social Anthropology*, 23(4).
- Grimshaw, A. & Ravetz, A. (2009) *Observational Cinema: Anthropology, Film, and the Exploration of Social Life*, Indiana University Press.
- Kisin, E. & Myers F. (2019) "The Anthropology of Art, After the End of Art: Contesting the Art-Culture System." pp. 325-26, *Annual Review of Anthropology* 48(1).
- MacDougall, D. (1998). *Transcultural Cinema*. Princeton University Press.
- Osman "Making Art Ethnography: Painting, War, and Ethnographic Practice." In Shneider, A. & Wright, C. (Eds.) *Between Art and Anthropology*, Berg 2010: 127-134.
- 宮坂敬造（2007）「グレゴリー・ベイトソンの精神の生態学と芸術の心性のシンポジウムの意義—（Mary C. Bateson 教授〔ハーヴァード大学〕を囲むシンポジウム『グレゴリー・ベイトソンの精神の生態学と芸術の心性』（企画と司会、討論）、慶應義塾大学アートセンター〈トランス文化の位相研究会〉シンポジウム、6月18日、慶應義塾大学三田校舎東館6階 G-SEC LAB 室。
- 同（2009）"The filming of visual sensibilities and filming process of the human mind."—The Visual and Academic Turn in Contemporary Japanese Academia." 分科会座長：分科会）The 1st International Conference on Visual Methods, Day 3, Session 7: 9:25-9:50, Clothworkers Centenary Concert Hall, University of Leeds, England.
- 同（2009）「映像実践を通じたこころの学際的研究—文化と医療誌における映像をおもな対象として—」（京都大学こころの未来連携研究代表として単独発表、京都大学こころの未来研究センター主催・研究報告会、12月5日、同大学稲森記念館中会議室。
- 同（2010）「〈映像人類学とアート〉人類学的表現の新地平を求めて—映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係」（2009年12月14-15日企画開催のシンポジウムの報告と討論）、アートセンター年報、慶應義塾大学、No.17, 35-37頁。
- 宮坂敬造「映像手法の範型としての映像人類学——人間諸科学に必須の肉眼知覚を中心とするシミュレーション」
- 同（2011）「映像人類学の理論と実践、その新たな展開の現在」pp. 253-256, 新井・岩谷・葛西編『宗教にやどる映像、映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』せりか書房。同（2014）「文化を写しとることは可能か—ベイトソンとミードの映像人類学から」、pp. 56-75. 村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）』せりか書房
- Miyasaka, K. (2013) "Where is your shooting position: trance, cine-trance, and the aspect of shared anthropology." (映像人類学ワークショップ [9:00-17:00] の5人のなかの単独発表), 11月21日, Workshop on Asia Pacific International Ethnographic Documentary Festival, University of Melbourne, Sidney Myer Asia Centre, 2F.
- 宮坂敬造（2020）「デザイン的人类学と多元感覚人類学が繋がる新たな人類学的課題の探求——オーストラリア先住民のメッセージ・スティックから、心理歴史誌的文化療法まで」pp. 261-278 東京通信大学紀要、第3号。同（2024）「ジャマイカの文化精神医学革新者 F. ヒックリングと心理歴史誌的文化療法について —参与経験をふまえて—」慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要、97号、pp. 77-85.
- Jay Ruby (1975) "Is an Ethnographic Film a Filmic Ethnography?" pp. 104-111, *Studies in the Anthropology of Visual Communication*, 2(2).